

「賞に恥じない仕事をしなければいけないけれど、賞をいただいたからといって変わることは何もない」

平成13年、日本民藝館展で最高賞となる日本民藝館賞を受賞し、民芸界の頂点に立つ。同16年、30歳代という若さで鳥取県伝統工芸士に認定される。経歴をわずかに聞きかじっただけでは、堅物なイメージが先行する。けれど当の本人は、清新で柔らかく、心根にスキツと筋が通っている印象。その手で作り出される中井窯の器そのものの、のような人。

「河原町中井のこの土地で生まれ育ち、一度も他所で暮らした経験はありません。焼物屋の子供に生まれたのだから、当然のように家業を継いだという感覚でこの世界に入りました。いちがいな（頑固な）親父の仕事ぶりを見て盗んで覚えましてね」

牛ノ戸窯の脇窯として昭和20年、祖父にあたる初代・坂本俊郎氏によって築かれた中井窯は、鳥

取民藝運動の父・吉田璋也氏の指導で新作民芸に取り組んできた。章さんは、高校卒業と同時に二代目となる父・實男氏に師事。そしていつしか、壁を越えられない自分に苛立ちを覚えていた。そんなときに出会ったのが、日本民藝協会常任理事・久野恵一氏だった。

「仕事に取り組み意識にはじまり、とにかく一から教えていただきました。相当厳しいことも言われて、崖っぷちの状態にもなりましたね」と、当時を懐かしむ。

この久野氏との出会いを機に、柳宗理氏からの依頼も舞い込むなど、周囲から徐々に認められるようになった。そして日本民藝館賞の受賞になる。



①地元の製材所から出る廃材を燃やす薪ストーブ。この灰が中井窯の釉薬(ゆうやく)づくりに欠かせない。②いかにも威厳(いげん)ある工人然とした二代目窯元・坂本實夫(みつぶ)氏。章さんの父上であり師であり、鳥取県伝統工芸士である。③柳宗理氏から送られて来た貴重な設計図。章さんがいまだ難しいというそのラインは実にデリケート。

「河原町の材料を使って、河原町の工人が作ってはじめて、中井窯の焼物である意味がある」

作業棟のすぐ傍らに曳田川(ひけたがわ)が流れ、窓からは山の緑が、空の青が望める。中井の豊かな自然の中にあつてこそ、章さんの器は生み出されるのだらうと思えてくる。

「釉薬(ゆうやく)も土も買えば簡単に手に入ります。しかしそれでは、中井の焼物である意味がない。河原町で出来る材料を使って、河原町に住む工人が作ってはじめて、この窯の焼物である意味があるんです」と、河原町への愛着は深い。一方で、地元根差したスタンスとは対極にあるような、柳宗理氏とのコラボレーション「柳ディレクション」について尋ねてみた。



「柳先生から送られてきた図面に則(したが)って作陶する、いわば共同作業です。世界の柳宗理ですから、先生の名前に恥じない仕事をしようとすると同時に、自分自身に恥じないよう、さらには前進するための修行だと思ひ取り組んでいます。きつと普通の職人さんだったら、こういう共同作業はしないでしょうね。けれど僕は、良い

ものを作ることを常に目標として、前進するための努力なら何でもします」と、実に屈託のない答え。この良い意味でこだわりのない軽やかさが、若者に支持されるスタイルの所以(ゆゑん)なのだろう。

「それに僕は、洗練されたデザインが好きですから、民芸に限らず鳥取の工芸全体のカテゴリーの中から、今あるイメージを変えていくことに挑戦したいという思いがあります。革新してこそ伝統であり、同じことの繰り返しなら伝承にすぎません。今まで続けられてきた仕事をベースに、現代の生活に合う手仕事として革新していく。そうすることで前にも進めると思うんです」

日本民藝館賞の受賞作品は愛知県豊田市の美術館に収蔵され、柳ディレクションは東京をはじめヨーロッパでも好評を得ている。1年365日の内360日を仕事に費やし、1日10時間以上も口口に向かう生活に何の変わりもない。けれど、ひとつの器に込められた革新の思いは、因幡に留まらず、すでに世界へと飛び立っている。

取材を終えて…

手仕事のあたたかさを残した洗練されたデザイン。それが坂本章さんの作る器の印象。民芸とは、どこか古風な骨董品のようなイメージが、この日、快く一新させられた。



章さんの手による柳ディレクションの代表的な器。民芸のイメージに納まらない新新(さんしん)さと温もりがある。